

<論文題目>

19 世紀イギリスの教員養成に関する考察

—民衆教育の教師を中心に—

指導教授 山中 芳和

論文指導教授 尾上 雅信

岡山大学大学院 教育学研究科 学校教育学専攻 22421005 渡辺 陽介

I. 本研究の目的

平成 19 年 3 月、文部科学省より「専門職大学院設置基準及び学位規則の一部を改正する省令等」が公布され、同年 4 月より施行された。岡山大学大学院教育学研究科においても、平成 20 年度より教職大学院「教職実践専攻」を開設しており、本年度 3 月をもって第二期生が修了を予定している。

近年の社会の大きな変動は、様々な専門的職種や領域において見られるが、これは学校教育についても例外ではない。今日、学校教育の抱える課題は複雑・多様化しており、こうした変化や諸課題に対応しうる高度な専門性と豊かな人間性・社会性を備えた力量ある教員が求められるようになってきている。こうした現状を受けて、教員養成の分野においては、研究者養成と高度専門職業人養成の機能が不明だった大学院の諸機能を整理し、専門職大学院制度を活用した教員養成教育の改善・充実を図るため、教員養成に特化した専門職大学院としての枠組み、すなわち「教職大学院」制度が創設されるに至った。

教職大学院の設置は、現代の日本の教員養成が、社会の急速な変化に対応するための変革の過渡期にあることを示しているといえる。社会の変化に対応して、その中に暮らす人々やその教育機関である学校、教育者である学校教員などの諸要素が適切に、柔軟に変化していく事態は、教育史においては現代に限らずあらゆる国、あらゆる時代で、しばしばみられてきたことである。殊更、教育史において現代日本とよく似た状況にあった事例としては、19 世紀のイギリスの教員養成制度の創成期が第一に挙げられる。当時のイギリス社会は 18 世紀後半より始まる産業革命の影響を各方面に受けており、機械の導入が進む工場労働は従来と異なる労働形態、雇用形態によって民衆の生活を大きく変化させた。一連の変化の波は教育界にも押し寄せており、社会の変化に対応した在り方を模索して、学校や教師、また彼らを養成する師範学校は、19 世紀を通じて様々な姿をみせている。

そこで、こうした特徴が見られる 19 世紀のイギリスの、特に教員養成を中心にその歴史的検討を行うことを通して、現代の日本に起こっている教員養成の変革の今後を展望していく上での手がかりとしたいと考え、本研究のテーマを設定した。

本研究の目的は、19 世紀のイギリスにおける教育の実態を（特に民衆のための初等教育を中心に）概観した上で、そこで拡大する教師の需要を満たすために生み出された 2 つの革新的な師範学校の事例をとりあげ、そこでの教員養成の実態を明らかにするとともに、

その歴史的意義を検討することである。

本研究で取り扱う2つの師範学校とは、バラ・ロード師範学校（Borough Road Training College）とバタースー師範学校（Battersea Training College）である。両校を取り扱った先行研究について、まず、バラ・ロード師範学校に関する研究には、主に以下の2つの文献があげられる。

- ① 松塚俊三著『歴史のなかの教師 近代イギリスの国家と民衆文化』、山川出版社、2001.
- ② 柳治夫著『<学級>の歴史学——自明視された空間を問う』、講談社選書メチエ、2005.

①の文献は、近世から近代にかけてイギリスに数多く存在した、デイル・スクールと呼ばれる私営の小さな学校から、19世紀初頭に登場したモニトリアル・システムを用いた授業を導入した学校への教育現場の移り変わりを、民衆の生活、地域社会の変容等に焦点をあてつつ詳述している。殊にバラ・ロード師範学校に関しては、貧民教育のために創設された同名の学校内に併設された師範学校としてとりあげ、そこでの教員養成の実態と、入学志願者たちの実態、民衆の教育・教師観を、当時の史料、書簡によって明らかにしている。

②の文献では、バラ・ロード師範学校に関しては詳細に言及されていないものの、同師範学校において教授の内容及び方法として導入されていたモニトリアル・システムの実態と歴史的意義について述べられており、教員養成の一場面を把握する上で重要なものである。

これらの文献を中心に取り扱いながら、バラ・ロード師範学校における教員養成の実態を読み取っていくこととする。一方で、バタースー師範学校に関する代表的な先行研究には、以下の2つのものがあげられる。

- ① 三好信浩著『イギリス公教育の歴史的構造』、亜紀書房、1968.
- ② 上野耕三郎著「ポリス、牧人司祭的テクノロジーそして学校教育：19世紀イギリス教育史研究その1の1」、『小樽商科大学人文研究95』、小樽商科大学、1998.

①の文献はイギリス公教育の歴史的な概念と構造を、公教育制度の成立過程をたどることで明らかにするものであり、その中で、公教育の制度や理念の構築に貢献した人物としてケイ・シャトルワース（James Kay-Shuttleworth, 1804-1877）と彼の公教育論を取りあげている。また、シャトルワースが取り組んだ教員養成として、彼が私費を投じて創設したバタースー師範学校に関する記述も見られ、同校を設置して教育実験を行うに至った経緯と、そこでの教員養成の理論と実態への言及がなされている。

②の文献では、モニトリアル・システムの克服のための新たな試みの象徴として、ストウ（David Stow, 1793-1864）やシャトルワースらの実践が取り上げられている。バタースー

シー師範学校については、シャトルワースの実践の一つとして、そこでの教師論を中心に取り扱っている。

これらの先行研究により、シャトルワースの実践とバターシー師範学校の概要が明らかとなってくるが、どちらも研究の対象としている師範学校は主としてバターシー師範学校となっており、19世紀の師範学校のもう一つの代表例といえる先のバラ・ロード師範学校を視野に入れての歴史的な面からの比較検討はなされていない。

以上を踏まえ本論文では、バラ・ロード師範学校とバターシー師範学校の比較検討を行うために、まず先行研究の補足を行う上で、バターシー師範学校における教員養成について、シャトルワース本人によって著され枢密院教育委員会に提出された教育実験の報告書である *Four Periods of Public Education 1832-1839-1846-1862* から、バターシー師範学校に関する報告に当たる *First Report on the Training School at Battersea* 及び *Second Report on the Schools for the Training of Parochial School Masters at Battersea* の2点を史料として取り扱うことで、その実態把握の一助とした。それを踏まえた上で、バラ・ロード師範学校とバターシー師範学校のそれぞれの生徒の在り方、教育の在り方を比較しながら、両校が後の教員養成及び師範学校に与えた影響を検討し、その歴史的意義を考察していった。

II. 論文構成

序章

第1章 19世紀イギリスの教育の実態

第一節 19世紀イギリスの社会と労働者の生活実態

第二節 教育組織の多様性～グラマー・スクールからデイム・スクールまで

(1) 上流・中流階級の子どもとパブリック・スクール、グラマー・スクール

(2) 民衆教育の組織—デイム・スクールとモニトリアル・システムの学校—

第三節 民衆教育の教師～その役割と地位

(1) デイム・スクールの教師

(2) モニトリアル・システムの登場

(3) 新たな教師像—1830年代、40年代以降—

第2章 19世紀イギリスの師範学校における教員養成

第1節 バラ・ロード師範学校の教員養成

第2節 バターシー師範学校の教員養成

終章

Ⅲ. 論文の概要

第一章では、19世紀のイギリスの教育の実態を概観するため、当時の社会の様態と民衆の生活状況、各階級向けに存在した特徴的な教育機関の様相、そして民衆のための学校に務めた教師たちの実態、といった観点に基づき、それぞれについてまとめていった。

第一節では、19世紀のイギリスの社会と労働者の生活実態について概観した。イギリスにおいて18世紀後半から始まる産業革命の中で、急速な工業化と都市化の影響により発生した様々な社会問題は、労働者階級の旧来の生活習慣や生活パターンを崩壊させた。また、機械の採用により労働が単純化し、女性や子どもの雇用が進んだことで、労働者階級の従来の家族の在り方までもが変化することとなった。様々な社会問題から労働者を救うために、政府は工場法などの整備を進める一方で、イギリスに続いて産業革命を成し遂げていった他国の生産力増強に対して、民衆に最低限度の読み・書き・計算の能力を身につけさせることで、これに対抗しようとした。こうした情勢は、近代的な社会に生きる民衆の教育要求とも方向性を同じくしており、1870年には初等教育法が公布されるに至った。

続く第二節では、19世紀のイギリス社会の急速な変化の中に存在した学校について考察した。まず、上流・中流階級の子弟のための学校として、パブリック・スクールとグラマー・スクールを取り上げた。これらの学校は、産業革命による社会の変化による影響を強く受け、カリキュラムの硬直化が最大の問題として立ちはだかることで、一時は衰退した。その原因は19世紀になっても、創立時と同じようにラテン語などの古典語教育がカリキュラムの中心であり続けていたことにあったが、このことは、古典語の教養が上流階級の証であり、上流階級へのパスポートであったとともに、生産に直接携わることのない彼らにとって、近代的諸学科が直接必要とはされていなかったためである。とはいえ、ことパブリック・スクールにおいては、中流以下の、民衆の教育機関において3R'sを中心とする近代学科が浸透していく中で、上流階級としての優越性を維持するためには、近代学科のカリキュラムへの導入が不可欠であったため、これを最低限カリキュラムに加えつつも古典語教育をより強化することで対応を行った。また一方で、パブリック・スクールよりも幅広い出身階層の子弟を受け入れていたグラマー・スクールにおいては、各階層の親たちの異なった教育要求を反映するため、それぞれの衝突と妥協の中で、それぞれの要求を満たすカリキュラムの構築が行われた。

こうした上流・中流階級向けの教育機関に対するものとして、中流階級以下の、特に民衆向けの教育機関のうち、次節以降の内容に繋がるものとして、デイム・スクールとモニトリアル・システムによる教育を行う学校にも焦点を当てた。デイム・スクールは近代イギリスにおける労働者階級の子弟の教育の一部を担っていたが、この学校はその多くが物理的環境の面でも、教育の実態の面でもあまり好ましくなかった。それでも19世紀を通じて根強く存続し続けた原因は、労働者の親たちの要望に密着した柔軟な教育と、共同体からの教師の信用にあった。

モニトリアル・システムの学校は、19世紀初頭に、従来の少数の生徒を相手にする教授

法に取って代わるものとして、多数の生徒を相手に安上がりで授業を行うことのできる教授法であるモニトリアル・システムを導入した画期的な学校として台頭した。高い効率性をもつこのシステムは「道徳的機械装置」とも呼ばれ、一時は賞賛を受けた。しかしやがて進歩主義教育思想が広まると、機械的注入主義のモニトリアル・システムは外部から批判の対象となるとともに、内部においても教育内容の近代化によるモニターによる教授の限界を迎え、やがては衰退していくこととなった。

第三節では、前節でみた学校のうち、特に民衆の教育を担当した教師について、対象をデイム・スクールの教師、モニトリアル・システムの教師、それに続く 1830、40 年代以降の教師の 3 種に絞り、彼らの実態や教師像を探っていった。

まずデイム・スクールについて、これは前述の通り物理的環境から見てよくないものが多かったが、それはその中で教育を行う教師にも同様のことが言えた。何らかの事情を抱えて教職に逃げ込んだデイム・スクールの教師であったが、彼らの所属する共同体においては、信用され援助を受けることでデイム・スクールは長らく存続し続けることとなった。

次にモニトリアル・システムの教師は、従来の伝統的な教師像を解体し、その機能を管理者であるマスターと助教に専念するモニターに分割した。厳しい軍隊的規律による管理はモニトリアル・システムを強く社会に印象付け、19 世紀前半において大いに普及した同システムであったが、やがてモニターによる指導の限界、教場を共有することによる騒音問題、軍隊的規律による威圧からの、生徒の学習意欲の喪失などの問題が発生するに至り、限界を迎えることとなった。

最後に 1830、40 年代以降の教師であるが、これには一斉授業による教育を行う教師が相当する。モニトリアル・システムの持つ問題点を克服するため、新たな教授法の開発が待たれたが、それはストウが推し進めた一斉教授法の台頭によって決着した。学校をモニトリアル・システムによる機械的な 3R's の知識伝達の間ではなく、道徳的訓練の間へと変えるこの言説及び教授法は、賞罰という功利的動機に訴えるのではなく、教師の人間的魅力、あるいは人間的働きかけによって子どもを引き付けようとする点でも、従来の教授法とは一線を画すものであった。

第二章では、第一章の第三節でみた 19 世紀の民衆教育の教師たちの実態と教師像を知識的基盤として、モニトリアル・システムによる教育を行う教師の養成機関の事例としてはバラ・ロード師範学校を、1830、40 年代以降の一斉教授による教育を行う教師の養成機関の事例としてはバターシー師範学校を取り上げ、それぞれをまとめていった。

バラ・ロード師範学校に関しては、まず最初に、その運営を担当し、モニトリアル・システムを用いて教授を行う学校施設の普及に尽力した内外学校協会について考察を行った。内外学校協会は、モニトリアル・システムの開発と普及事業を行っていた J・ランカスター (Joseph Lancaster, 1778-1838) を援助する団体であった「英国王立ランカスター式学校普及協会 (The Society for Promoting the Royal British and Lancasterian System)」が

そもその母体であったが、やがてこの団体がバラ・ロード校を中心とする既存の学校の運営を担当するようになり、最終的には不祥事を重ねるランカスターを追放し、組織の名称も「内外学校協会 (The British and Foreign School Society)」に改めるに至った。内外学校協会はバラ・ロード校を本部とし、学校運営の基本方針やマニュアルを作成することで、イギリス全土に協会傘下の学校網を張り巡らせ、更に各学校を動かしていくための本部の体制を整備し、組織として学校の普及のための数々の活動を展開した。これにより、各地でモニトリアル・システムを用いた学校を比較的簡単に設立し、運営することが可能になったが、どこでも直ちに有能なモニターを確保しうるわけではないことが問題となり、協会は十分な数のモニターを確保するためバラ・ロード校にモニター養成機能を担わせることとした。これがバラ・ロード師範学校であり、同校はバラ・ロード校内部の教育課程の一つとして、また事実上最初の教員養成機関として成立した。

バラ・ロード師範学校での教員養成は、助教生の一部を教育する形で 1805 年に開始された。後に設立されていった他の師範学校と比べても、バラ・ロード師範学校は特に多くの教師を送り出していることが確認されているが、その最大の理由は 3 ヶ月にも満たないほどの短い訓練機関にあった。協会の資金不足や圧倒的な教師の不足を解決するために、一定の年齢に達した成人から師範学校の入学生を募り、短時間でモニトリアル・システムを会得させることで、同システムにおけるマスターとしての機能を全うできるだけの、最低限の能力をもった教師を養成する方針が採用されていたのである。しかし後に、モニトリアル・システムを教授法として用いた学校において、教育内容が複雑化しモニターでは対応できなくなってくると、より高い能力をもった教師を養成することが不可欠となり、バラ・ロード師範学校における教員養成のカリキュラムも、これに対応したものに改良されていった。1839 年以降のカリキュラムにおいては、科学や「有用知識」を重視し、教育学を取り入れ、また教育実習においては一斉教授に重点が置かれており、この時点で、従来のモニトリアル・システムに極度に依存した養成方針から脱却し、またそれを克服したカリキュラムが整えられていたといえる。

次にバターシー師範学校に関してであるが、同校は 1840 年に、当時枢密院教育委員会の局長であったケイ・シャトルワースが開設したものである。海外視察の経験を生かし、シャトルワースはバターシー師範学校で実験的かつ革命的な教員養成を展開した。そこでの教員養成においては、教員としての性格形成が最大の目標として掲げられ、全ての教育活動はこの基本目標に従って展開された。ここでいう性格とは、民衆の学校、貧困児童の教員に相応しい性格を指しており、具体的には (1) 貧民階級に同情し、(2) 教員としての使命感をもって、(3) キリスト教的慈善心を支えとしながら、(4) 自己犠牲・自己否定の精神に徹することのできる、こうした特質を内包した性格である。すなわち、この性格をもった教員こそが、バターシー師範学校において理想とされた教師像であった。

教員としての望ましい性格形成を目標として、バターシー師範学校では、ハウスホルドとしての生活場面、クラス・ルームにおける生活場面、土と結びついた生活場面の、3 つの

生活場面の中で、各教科の学習及びその他の作業や実習が実施された。それぞれの生活場面について、まずハウスホルドとしての生活場面であるが、バターシー校においては、教官と生徒はともに学園内に居住し、一家族のような家庭生活を営むことで、生徒の健全な習慣と道徳性の形成が図られた。次にクラス・ルームにおける生活場面とは、有用性を重視した予備的・基礎的な教育を行う最初の一年間における予科師範学校とも呼ぶべき段階を指す。ここでは「学習の有用性についての生きた感覚」によって学習の動機付けが目指された。土と結びついた生活場面とは、勤労の習慣を育成し、農民と同一の階級意識との中で果たすべき自己の使命感を体得するための庭園活動を示している。ここで学んだ技術は、将来農村の学校教員となった際に児童の技術指導に役立たせることや、教師としての日常生活におけるレクリエーション、健康と家族の楽しみとして利益に繋げることが期待されていた。

バターシー師範学校における各教科の学習は「知性の正しい道徳的状态」を目指して行われた。シャトルワースは彼独自の総合的教授法を考案し、それを各教科の教授法として採用していた。彼の論じたこの総合的教授法においては、「すべての要素が、相互に、最も単純なものから最も複雑なものへの発展的連続の関係をもつことができるように、教材を総合的秩序に従って配列し」、それを熟練した教員が生徒に提出する。その際、生徒に対しては分析を要求せず、教員が予め分析して得た教材の論理的配列の順序に従って提出するものを、生徒はただ総合的に受け止めるように要求する。シャトルワースはこの総合的教授法を自身の担当する教育学の講義において生徒に教授し、更にこれを村落学校における教育実習の中で実践させることで、生徒に習得させた。

また、教育実習に関して、バターシー師範学校では一年半の養成機関のうち6～8ヶ月間、毎日3時間ずつ村落学校での実習指導を生徒に課した。生徒らは各教科の教授法、学校の管理と教授の技術、ギャラリーでの教授技術、学校の編成や規律について実地での指導を受けることで、師範学校における性格形成を教授技術の訓練へと結びつけた。こうして「精神の優位」がしばしば陥りがちな「技術の貧困」の弊害が克服され、性格と技術との調和が図られたのである。

以上を受けて、終章においては、バラ・ロード師範学校とバターシー師範学校の比較考察を行い、また特にバターシー師範学校に関しては、その後の教員養成制度改革の概要を踏まえた上でその歴史的評価を行った。

2つの師範学校の比較考察については、その観点を1. 生徒の在り方＝養成の結果、目指された教師像、2. 教育の在り方＝教授の方法と内容、以上の2つに設定した（なお、2.における教授の方法と内容に関しては、養成の結果、生徒が習得すべき教授の方法及び内容を示す）。以下がその内容である。

1. 生徒の在り方＝養成の結果、目指された教師像

まず、バラ・ロード師範学校において目指された教師像であるが、これは同師範学校の成立当初の短い養成期間から比較的容易に推察することができる。一定の年齢に達した成人から師範学校の入学生を募り、短時間でモニトリアル・システムを会得させることで、3ヶ月にも満たない短い養成期間の中で生徒を教師に仕立て上げていた事実からは、「モニターに教授できるだけの最低限の3R'sの教養と、モニトリアル・システムにおける全体の管理者であるマスターの役割を全うできる人物」が、ひとまずは目指されていたことが分かる。しかし、能力的には最低限の水準が求められた一方で、その他の人間性ともいふべき、教師になる者としての適性については、入学志願者を選抜する時点で慎重に判断されたようである。内外学校協会は志願者たちの素性を、彼ら自身の動機や、彼らの身近な者たち（多くの場合、聖職者など地域の有力者であった）からの推薦文によって、入学を許可する者を選別した。最も重要とされた決め手は応募者の「宗教的・道徳的資質の確かさ」であった。これらの資質は子どもたちの宗教教育に必要であったし、短期間ながらも厳格な訓練に耐え、更には将来の不遇な教師生活に耐え抜いていくためにも必須の条件であった。

次に、バターシー師範学校において目指された教師像について、これは同師範学校のカリキュラム全体を通じて目指された、教員としての望ましい性格形成から窺い知ることができる。バターシー師範学校においては、民衆の学校、貧困児童の教員に相応しい性格の形成が目指されており、それは具体的には(1)貧民階級に同情し、(2)教員としての使命感をもって、(3)キリスト教的慈善心を支えとしながら、(4)自己犠牲・自己否定の精神に徹することのできる、こうした特質を内包した性格であった。

性格形成を教員養成の第一の目標に据えるバターシー師範学校の養成の在り方は、バラ・ロード師範学校が入学志願者の選抜の時点で、彼らを「宗教的・道徳的資質の確かさ」によってふるいにかけていた事実とは対照的であるといえる。また、バターシー師範学校は養成カリキュラムの中に、村落学校における教育実習を一年半の養成機関のうち6～8ヶ月間、毎日3時間ずつ組み込んでおり、これにより生徒らは各教科の教授法、学校の管理と教授の技術、ギャラリーでの教授技術、学校の編成や規律について実地での指導を受け、師範学校における性格形成を教授技術の訓練へと結びつけた。バターシー師範学校は、性格と技術の両面を調和させつつ育んでいくカリキュラムを整えることで、精神論に止まらず、確かな技術を獲得した教員の養成を図っていたといえる。

2. 教育の在り方＝教授の方法と内容

教授の方法と内容について、まずバラ・ロード師範学校に関しては、1839年のカリキュラム改定の前後で変化が生じていることに留意しなければならない。設立当初のバラ・ロード師範学校においては、前述の通り、短い訓練期間の中でモニトリアル・システムを習得することが目指されていた。同システムが内外学校協会傘下の学校網の拡大にあたり重要な役割を果たしていた時期においては、これは妥当なものであった。しかしやがて時代

が下り、モニトリアル・システムによる教育が限界を迎えるようになると、バラ・ロード師範学校のカリキュラムも改良を余儀なくされた。その結果が 1839 年以降に導入されたカリキュラムであり、科学や「有用知識」を重視し、教育学を取り入れ、教育実習においては一斉教授法に重点を置くそのカリキュラムは、モニターによる指導が難しかった近代学科を重視し、また同時にモニトリアル・システムからも脱却したものとなっている。

一方で、バターシー師範学校において採用された教授の方法は、設立以降一貫して一斉教授法であった。このことは、第一章の第三節で触れた通り、バターシー師範学校の創設者であるシャトルワース自身が、教師と生徒の継続的・対面的接触が可能となる一斉教授法に傾倒していたためである。より詳細には、バターシー師範学校においてはシャトルワース自身が考案した総合的教授法の習得が目指されていたが、これはあくまで一斉教授法に則ったものであったと考えられる。なお、同師範学校における教授の内容は、入学後 1 年目の予備的・基礎的教育において、宗教、文法、語源、算術、数学、代数、暗算、測量、力学、地理、地球儀、博物、用器画、実物教授、イギリス史、音楽などが教科として設定されており、生徒が将来的に教職に就いた後に要求されるであろう教科については、十分網羅されていたのではないかと考えられる。

以上のように両師範学校の比較を行ったが、総じてバターシー師範学校の方がより先進的な教員養成を実践していたといえよう。1830、40 年代以降の民衆教育の提唱者であり、また枢密院教育委員会の局長も務め、当時のイギリスの教育界を牽引した人物の一人であるケイ・シャトルワースが創設した師範学校であることを考えれば、これは必然の結果であるように思われる。

ケイ・シャトルワースは、枢密院教育委員会の教育局長として教員養成に関する政策の立案遂行の任にあたり、民間の教員養成学校に対する国庫助成計画を続け、師範学校の設置を奨励した。7 年間の実践を通して、委員会は公的政策への基礎を固め、1846 年には、教員養成が直面する困難を解決するための覚書を公表するに至った。

この覚書は、教員の資質に急速な進歩をもたらすとともに、公教育全体に対して大きな影響を与えた。ここでは特に、教員養成に関して成立した 3 つの制度に着目する。その一は、師範学校に優秀な志願者を継続的に供給した教員見習生制度であり、その二は、師範学校において優秀な学生が長期間にわたり教育を受けるための経済的条件を保証する女王奨学生制度であり、その三は、師範学校卒業後における身分と地位とを保障するための教員免許制度である。これら 3 つの制度によって、教員養成において師範学校の運営者と入学者のそれぞれが抱えていた複数の困難と、教師の社会的地位や経済的な困難が解決・改善されることとなった。

そもそも枢密院教育委員会はこれ以前にも、国内で高まる教員養成に対する要請を受け、それに応じるための様々な対策を検討していた。まずは 1839 年の時点で、公教育計画の一環として国立の師範学校の計画を公表している。この計画は当時の宗教的偏見を無視する

大胆な企画であったため、宗教団体の強力な反撃を受け、計画を撤回せざるを得なかった。しかしシャトルワースはこれに代わる次善の策として、自らの出資で私立の教員養成学校を設置して本格的な教員養成の実験をなし、将来において公的支配を漸次導入することを計画した。これこそが、本論文の中で取り扱ったバターシー師範学校である。彼はまた、委員会の教育局長として教員養成に関する政策の立案遂行の任にあたり、国立師範学校計画の挫折以後は、民間の教員養成学校に対する国庫助成計画を続け師範学校の設置を推奨した。7年間の実践の間に、委員会はより大きな公的政策への基礎を固め、かくして公表されたのが、1846年の覚書であった。

バターシー師範学校は、シャトルワースが公教育計画を遂行する上で中核的な役割を果たしたが、覚書の公表以降においても重要な役割を演じることとなった。覚書の公表の影響を受けて、師範学校の設置維持に関わる財政的困難が軽減されたこと、また委員会が民間の師範学校設置を推奨したこと、民間の教育団体の側において教員養成の重要性に対する認識が高まったこと、などの理由から私立師範学校の設置が急速に進捗したが、バターシー師範学校はこれら後続の師範学校のモデル的な役割を果たしたのである。ここに、バターシー師範学校の教育史上に占める重要性が示されているといえよう。バターシー師範学校が後の師範学校に与えた影響は編成・教授・規律の各面において顕著であったが、ここでは特に次の2点に注目したい。

その一つは、寄宿制師範学校の原型が作り出されたことである。これは後に通学制師範学校の出現に至るまでの50年間、全ての師範学校によって模範とされた。ケイ・シャトルワースは、当時の入学生が貧困階級の出身者でありその家庭が破壊または頽廃していたこと、及び商業社会の金銭的報酬への欲望が有害であったとの理由から、生徒を親と社会から隔離し、彼の基本的な教育目標である性格の形成を図ったのである。

もう一つは、バターシー校の教育が訓練主義的性格を有していたことである。課程・教室・農園の3つの生活場面においては性格の訓練がなされ、実習校の村落学校においては教授の技術の訓練がなされた。この訓練主義的性格もまた以後の師範学校の模範となったが、とりわけ教育実習による教授技術の実地訓練は、今日にいたるまでイギリス教員養成の伝統として受け継がれている。

今日的な立場から考えれば、バターシー師範学校のこうした特質は批判を受ける諸要素を内包しているといえる。寄宿制ゆえの、生徒にとって閉鎖的な生活環境や、訓練主義的性格が細部にわたりあまりにも厳格すぎる点などがそれにあたる。現代の教員養成論からみれば、バターシー師範学校のやり方には幾多の批判がなされるであろうが、そのことは、教育史上に占める同師範学校の先駆的位置を否定することにはならないだろう。

以上のことから、イギリスの教員養成史、ひいてはイギリスの教育史において、バターシー師範学校は、枢密院教育委員会とその局長であったケイ・シャトルワースの公教育計画の中核として、質の高い教員の安定した供給を可能とするための教員養成機関、すなわち師範学校の機能を実証した点と、それ以降に設立された師範学校にとってのモデルとし

での役割を果たした点で、二重の、重要な役割を演じたといえよう。

IV. 主要参考文献

- James Kay-Shuttleworth, *Four Periods of Public Education 1832-1839-1846-1862*, 1993
- 松塚俊三著『歴史のなかの教師 近代イギリスの国家と民衆文化』、山川出版社、2001.
- 三好信浩著『イギリス公教育の歴史的構造』、亜紀書房、1968.
- D・ウォードル著／岩本俊郎訳、『イギリス民衆教育の展開』、共同出版株式会社、1979.
- R・オルドリッチ著／松塚俊三・安原義仁監訳『イギリスの教育——歴史との対話』、玉川大学出版部、2001.
- 柳治夫著『<学級>の歴史学——自明視された空間を問う』、講談社選書メチエ、2005.
- 世界教育史研究会編『世界教育史大系 7 イギリス教育史 1』講談社、1978.
- 世界教育史研究会編『世界教育史大系 8 イギリス教育史 2』講談社、1978.
- 松井一磨著『イギリス国民教育に関わる国家関与の構造』、東北大学出版会、2008.
- 太田直子著『イギリス教育行政制度成立史—パートナーシップ原理の誕生—』、東京大学出版会、1992.
- 江藤恭二監修『新版 子どもの教育の歴史—その生活と社会背景を見つめて—』、名古屋大学出版会、2008.
- 平野一郎、松島鈞編『西欧民衆教育史 民衆は教育にどのようにかかわってきたか』、黎明書房、1981.
- 角山栄、川北稔編『路地裏の大英帝国 イギリス都市生活史』、平凡社、1982.
- 竹内洋著『パブリック・スクール 英国式受験とエリート』、講談社、1993.
- 上野耕三郎著「統治とケイの活動—19世紀における国民教育論出現の可能性の条件—」、『小樽商科大学人文研究 111』、2006.
- 上野耕三郎著「ポリス、牧人司祭的テクノロジーそして学校教育：19世紀イギリス教育史研究その1の1」、『小樽商科大学人文研究 95』、1998.
- 上野耕三郎著「天職としての教育：19世紀イギリス教育史研究その2の5」、『小樽商科大学人文研究 90』、1995.
- 上野耕三郎著「<個人>産出の技術としてのモニトリアル・システム：19世紀イギリス教育史研究その2の1」、『小樽商科大学人文研究 88』、1994.
- 上野耕三郎著「19世紀英国の労働者階級文化と教育態様についてのノート」、『小樽商科大学人文研究 73』、1987